

<翻訳と訳者解説>

ゴフマン, ガーフィンケル, そしてゲーム

著者：ダグラス W. メイナード

訳者：樫田 美雄* 神戸市看護大学

*E-mail:kashida.yoshio@nifty.ne.jp

Goffman, Garfinkel, and Games

Author: Douglas W. Maynard (University of Wisconsin-Madison)

Translator: KASHIDA, Yoshio (Kobe City College of Nursing)

※注 樫田は2020年7月に、本訳文の改訂を行い、冊子の第2版を作成した。

【翻訳】

第1パラグラフ

これはガーフィンケルの社会学とゴフマンの社会学との関係についての覚え書きである¹。この覚え書きは、[昨年本誌、すなわちアメリカ社会学会の機関誌の1つである『社会学理論 (Sociological Theory)』誌に掲載された] Denzin (1990) でのガーフィンケルに関する議論に刺激されて書かれたものではあるが、私の目的はデンチンの論文から注意をそらすことである。なぜなら、デンチンの論文は Garfinkel (1967) が、トランスセクシャルである「アグネス」の章²で書いている内容を歪めていると思うからである。したがって、アグネスの章をガーフィンケルの本来の意図通りに汲み取り、再検討する。なぜなら、ガーフィンケルの論文は、エスノメソドロジー研究の「古典」とされているにもかかわらず、(以下で引用するが) デンチンの小論では、いくつかの重要な側面が無視されてしまっているからである。彼の小論は、ガーフィンケルとゴフマン(日常生活における偉大な二人の社会学者)の間にある主な相違が「一体どのようにして社会理論における問題をより一般的な形で説明しているのか」を明白にするためのスプリングボードになるであろう。その問題とは、社会理論の要素として、「その時その時性 (テンポラリティ)」を組み込むことに関わる事柄である (Giddens 1984, 1987を参照せよ)。

第2パラグラフ

エスノメソドロジーは普通の、日常的で、協調的な人間の活動という現象に関係しているので、エスノメソドロジーは「無視されてきた状況」とその「相互行為秩序」への Goffman (1964, 1983) の関心に近いように一見みえる (ガーフィンケルとゴフマンに近しい関係を割り当てることは、エスノメソドロジーとゴフマン社会学をまとめて象徴

的相互作用論の中に包含する一般的な傾向とおそらくは同じ徴候である)。実際に、前述の小論³においてデンチンは、エスノメソドロジーが「相互行為のゲーム・モデル」(1990:204)に適合的であると示唆している。もしそうなら、このエスノメソドロジーの特徴付けは、エスノメソドロジーの研究領域を、(ゲーム・モデルに適合的な)ゴフマンのドラマトゥルギーに近づけるだろう。しかしながら、本当のところ、ガーフィンのアグネスに関する研究は非常に異なる別の「何か」を確立したのである。その諸功績(contributions)の中でもとりわけ、本研究が「実際の社会的相互行為をゲームとして暗喩すること」に対して重要な批判を展開している点が際立っている。ガーフィンの批判は、ゲームやルール、そして「合理的選択」が対面行動のパラメータを定義するような、そういう社会理論をターゲットとしている。

第3パラグラフ

Goffman (1983)によれば、人々は日常生活の大部分を他者がいる環境下で過ごしている。それゆえ、そのような社会的な状況性は重要な結果をもたらすものとなる。他者とともにある状況[共在⁴の状況]での相互行為の領域は、これまで考えられていたような、社会構造の関連物としての社会的関係、非公式のグループ分け、公的制度、あるいは年齢、民族性、性別、階級のような公的カテゴリーとは違って、「社会構造」の単なる影響で生じているのではない、洗練された儀礼によって形作られた儀式的なものの領域なのである。一例をあげよう。Goffman (1983)は、顧客がサービスを受ける順番を待つときの行列という「接触」儀礼に言及している。行列は、並んでいる人の外在的に構造化された属性(たとえば、年齢、人種、ジェンダー、階級)にのっとなって組織しうるが、通常は、そのような諸要因を等閑視して、先着順の原則にのっとなって組織されるのである。

第4パラグラフ

つまり Goffman (1983:15)は、相互行為秩序には複雑さがあることを示唆している。その複雑さは特に、人々が「ノーマルな様式」を密かに破り、裏で利用しているような行動において顕著である。[ゴフマンの]行為者は社会的慣習にむけて自らの態度を提示し、社会的慣習に関連付けて自らの「自己」を定義する(Goffman 1964)ために「ノーマルな様式」を密かに破り、裏で利用するのである。さらには、反対に無関係な社会構造的アイデンティティを表現する(Goffman 1983:15)ためにも前述の行動を取る。それゆえ、エスノメソドロジーとゴフマンの社会学との違いを理解する上で非常に重要なのは、相互行為秩序が、「ゲームの基本ルール、交通ルールの諸規定、あるいは言語における統語論などと同義の、慣習を有効化するシステム」からなるということである(Goffman 1983:5)。通常、ルールは遵守される。ルール違反が発生することはあっても、自己の定義や社会的意味の創造・維持を含む、当該のプロジェクトを遂行するため

のリソースとして役立つだけで、ゲームや言語を脅かすことはない。そのため、ゴフマンの行為者は、ナイーブな調和主義と、露骨なルール破りとの間の立場を取るものではない。むしろ、ゴフマンの行為者の相互行為秩序に対する志向性は、深く道徳的なものである。それは何とかして（ルールの遵守や違反を通して）自己を出現・保持することを可能にする献身（コミットメント）に基づいているからである（Rawls 1987 : 42 - 44 を参照）。

第5パラグラフ

しかしながらゴフマンは議論全体を通して、「ゲームのルール」および社会的意味を確立するために様々な方法で行われている「ゲームのルールの使用」を重要視するに留まっている。このゴフマンの観点に対し、ガーフィンケル（1967）は、「アグネス」の章の中で、ゲームと日常生活との間には大きな違いが存在すると論じている。例えば、ゲームは私的な定義に依存しない客観的で計算可能な結果を伴う公的事業である。さらに、ゲームをしている間、プレイヤーは、世界についての彼らの日常的な想定については、判断停止状態にしている。しかしながら、プレイヤーはゲームをやめて日常生活を再開することを選ぶことができる。さらに、ゲームのルールは、プレイをしている間は、発見も変更もされない。ゲームのルールは最初から知られており、ゲームが完了するまで無傷のままなのである。一方、実生活では、人々は、「関連性の織物」（Garfinkel 1967 : 166 - 167）として、リアルタイムで管理されなければならない、予期していなかった状況や、その場その場の条件（コンティンジェンシー）をともなった、連続的な行為に埋め込まれている。すなわち、行為者は社会的状況の中に位置づけられているので、(置かれている)環境の「ノーマルな様式」を維持するために何が求められているかを学ばなければならないということである。彼らの社会環境に対する感覚（「規則の支配下」にあり、それ故に戦略的管理が可能であることを含む）は、自明視された諸要素つまりはアプリオリな日常的慣行に彼ら自身が忠実に従っているということに依存している。そして、この自明視されたアプリオリな日常的慣行は、行為者が感じ取る社会環境を最初に提供するものである⁵。

第6パラグラフ

ゴフマン主義者の立場から見ると、トランスセクシュアル [であるアグネス] の社会的課題は、他者が彼女 [すなわち、ペニスと元男性としての人生経歴を持つアグネス] を普通の女性だと見なすように、[他人が受けとる] 印象を戦略的に管理することであっただろう。彼女はおそらく、予期される相互行為的な諸エピソードにかんする想像の上でのリハーサルを通して、彼女が会おうかもしれない諸問題にかんする慎重な予想を通して、そしてこれらの問題を扱う諸戦略をどのようにして採用するか計算することを通して、この管理をすることができたかもしれない。しかし[トランスセクシュアルの]

アグネスが実際に彼女の「性別」の地位の可視性を達成しようとしたとき⁶、そのような方法では物事が上手くいかないということが分かった。彼女の期待や予想は、しばしば外れた。さらに、「パッシング（やり過ごし）」を上手く行うことができた理由は、「これを行えば、あれが起こる」というような、抽象的かつ規範的な印象管理のおかげではなかった。他人の現実的な各々の反応に基づいて、「彼女の行為および経験が、目指していた自然で標準的な女性像とどのように一致しているか」を考える必要性がすべての瞬間に満たされていたことこそが理由である。たとえば、アグネスには、他の女性（彼女のボーイフレンドの母親など）と、装うこと、買い物すること、そして料理をすること、などの「女性」の事柄について話し合うなかで、自分自身をうまくパッシング（やり過ごし）できる存在にしていく〔事前戦略的〕保証はなかった。代わりに、アグネスはそれらの話し合いのまっただ中において、「どんな」女性でもそうするように、彼女が知る必要があることを学んだのだった⁷。

第7パラグラフ

アグネスの章には、戦略的行為の、実践過程内での習得の他の例が含まれているが、重要なのは「日常生活はゲームではない」ということである。他のプレイヤーを裏切るために事前に確立された技術と「方法」を使用するというようなことが重要というわけではない。〔アグネスが実際にもちいたような〕絶え間ない協調努力において機転を利かせることが重要である理由は、人々は物事の背景が持つ外見上の特徴を現実化するために、これまでの行為が彼らに教えることから次に何が求められるのかに対して、警戒を怠ってはいけなからである。その状況下で適切な手順を習得できなければ、いかなる特徴も実現せず、また社会のメンバーとしての地位も疑われることになる⁸。つまり、ゲームとは異なり、実際の生活ではタイムアウトは発生しないし、行為者が別の戦略を企てる間の、休憩時間があつたりもしないのである。行為者が立ち止まって熟考することは、客観性と、不達成となる可傷性（ヴァルネラビリティ）が持ち込まれる、という特徴を与えるものである。繰り返しになるが、躊躇する行為者は無能であると見られる。なぜなら、他のメンバーは、彼／彼女の道徳的説明可能性⁹の観点から欠落を読み取り得るからである。したがって、日常生活の研究にとって、すべてのものの「過程的な」達成を分析することは、重要である。それが、人々のあらかじめ構成された社会的事実性、たとえば、広く流布している〔男女という〕2項対立的な人間の性的配置に対して、逆説的に対抗するものであったとしても、たいへんに重要なものなのだ。

第8パラグラフ

もし、エスノメソドロジー的な理論化が、ゴフマンと日常生活の内在的組織の分析への関心を共有しているのなら、エスノメソドロジー的な理論化〔の特徴〕は、実際の出来事のその時その時の展開にしたがって、行為者が経験する偶有的な条件への依存性

(コンティンジェンシー) に対する敏感さを、より一層 [追加的に] 強く組み込んでいくのだ。改善のための努力は進んでいるが(さらなる議論のためには、Boden 1990, 199-201; Clayman 1989; Giddens 1987 の第6章、を参照せよ)、社会理論は、日常生活が持つ「その時その時性(テンポラリティ)」を、長い間無視してきた。それは、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、リクールやその他の学者の著作物に対して無関心であったことが原因の一つであるかもしれない。上述の事態は、合理的選択理論(Coleman 1990)においては特に真実であるといえよう。ひとつ最近の例をあげるのなら、ゲーム理論がよい例となるだろう。そこでは、個人の行為者が、身体性を持った存在への理解を欠いた状況下で、コスト・ベネフィット分析と抽象的な利益に基づいて、市場、あるいは、他の自由で合理的な交換の諸体系において「プレイ」するのである。ガーフィンケルのアグネスの章に見られる珠玉の社会学的英智の一つは、もし人間というものが結局のところ合理的であるのならば、それは人間が実践的であるからである、という点に置かれている。そして実践的合理性とは、とりわけ「内在的かつ肉体化した時間に基づき、日常の出来事になんとか対処していく」ことを伴っている¹⁰。

【注】

¹ 以下、この訳文における全ての注記は、訳者である榎田によるものである。長い注記はこの「訳注」に連番を付して載せたが、短いものは、当該の単語やフレーズを [] でくるんで本文中に挿入し、訳者による挿入であることを表示した。メイナード教授本人による注記は、この小論に関しては存在しない。また、原文には「小見出し」も存在しないが、パラグラフごとの意味のまとまりには注意を喚起したいと考え、訳文においては、パラグラフ番号を各段落のはじめに記した。なお、出だしの文の冒頭の「これ」とは、Douglas W. Maynard, 1991, "Goffman, Garfinkel, and Games", *Sociological Theory*, Vol. 9, No. 2 (Autumn, 1991), 277-279. のことである。

² ここで言及されている「アグネス」論文は、ガーフィンケルの主著である『エスノメソドロジー研究』に収録されている、次の論文であり、それがなぜ「アグネス論文」と呼ばれているのかといえれば、ガーフィンケルが長時間インタビューした性転換希望者の名前がアグネスであるからである。Garfinkel, Harold. 1967. "Passing and the Managed Achievement of Sex Status in an Intersexed Person." in *Studies in Ethnomethodology*, edited by Harold Garfinkel. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall : 116-85.

なお、この論文には、以下の抄訳が存在する。山田富秋訳 1987「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたか—ある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」 in 山田富秋・好井裕明・山崎敬一 [編訳] 『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体』せりか書房。

³ ここで「小論」と訳したタームは、原文では「passing comment」である。この表現は、デンチンが言及している論文(ガーフィンケルの書いた「アグネス論文」)が、性転換希望者アグネスの「パッシング(やり過ごし)」に言及していることと、デンチン自身が、ガーフィンケルの重要な論点を「パッシング(やり過ごし)」していることとを重ねあわせた(少々皮肉な)言い回しなのだろう。

⁴ 「共在」という用語は、日本のゴフマン研究者のなかで培われてきた用語であり、

かならずしも、同じ集団に属しているわけではない人間と人間が、ともに居合わせる状況を指している。そのような状況にも秩序があり、社会的に探究すべき事象が存在するのである。本稿の著者のメイナードは、ガーフィンケルとゴフマンの近縁性にかんしては、いずれもが相互行為秩序の探求者であった点については承認しているように思われ、その承認内容を「共在の社会学と相互反映的相互行為論との近縁性」とまとめてもよいと考えた。そのため、ここでの言い換えに「共在」の語を使用した。なお、ゴフマンの社会学について、その概要と日本における評価を知るには、各訳書の解説のほか、以下の2冊の書籍を見るのが簡便であろう。「安川一編 1991 ゴフマン世界の再構成-共在の技法と秩序, 世界思想社」および、「中河伸俊・渡辺克典編 2015 触発するゴフマン-やりとりの秩序の社会学, 新曜社」。この2冊である。

⁵ この部分の意味はたぶん、以下のようなことだろう。すなわち、ゴフマン的なゲームの世界では、ゲームのルールはよく知られていて、かつ、その適用が実際にあるかどうかは不明である、というようなことはないので、戦略は事前に組むことが可能だし、その場その場での状況に依存して考える必要もない。けれども、実際の日常生活では、ガーフィンケルが主張したように、どのようなルールが適切で適用可能なものなのかは、あらかじめ分からないし、かつ、一連の活動の途中でも、ルールに関する状況は刻々と変化するものなので、日常生活の行為者は、ルールを利用する時ですら、状況の刻々の変化を追いかけなければならないし、[ルールというよりは] 当たり前のものとして受入れられているものにこだわりつつ、そのルールや、戦略の方針というものを、運用していかなければならない、というようなことが主張されているのだろう。つまり、客観的ルールに支配されたゲームの世界をゴフマンに割り当て、客観的ルールすら日常的な諸前提のなかで意味をもったり持たなかったりするのだという日常生活の世界をガーフィンケルに割り当てる対比的な議論が、ここでは展開されているのだろうと思われた。

⁶ すなわち、女性として「パッシング（やり過ぎ）」をしようとしたときという意味だろう。

⁷ ガーフィンケルは、この「パッシング（やり過ぎ）」におけるゴフマンとガーフィンケルの対比を、ゴフマンにおいては「passed」と完了形で表されるような事象が、じっさいには「passing」と、現在進行形であらわされるような事象になっていたのだ、と表現している。メイナードは、この2つの「パッシング表現」の対比的構造を、この論考では表に出して解説に利用していないが、榎田（1991）では、数頁にわたって図示しながら、解説している。榎田美雄 1991 「アグネス論文における〈非ゲーム的パッシング〉の意味—エスノメソドロジーの現象理解についての若干の考察—」 in 『年報筑波社会学』3:74 - 98（この論文のPDF ファイルは、筑波大学のレポジトリ中に置かれ、無料で公開されている）。

⁸ この部分は、「レリバンス（関連性・有意味性）」が、時々刻々変化することが日常生活の特徴である、という主張であろう。このことについてガーフィンケルは、ゴフマン批判の形で、ゴフマンはさやにはいったカプセル化された「エピソード」をもとに「パッシング（やり過ぎ）」を語っているが、実際には、状況は当事者にとって不分明なものなのであり、カプセル化された「エピソード」など日常生活にはほとんど存在しない、というような主張をしている。より詳しくは「訳者解説」に書誌事項を記したので、（榎田 1991）を参照して欲しい。

⁹ ここで「道徳的」という形容句が使われていることを奇異に感じる読者もいるかもしれないが、エスノメソドロジーが明らかにした重要な知見として、コミュニケーションにおける秩序違反行為は、道徳的な問題行為として扱われるというものがあり、メイナードはその知見を受けてここを書いているのだろうと思われる（たとえば、D. サドナウは、母親の死を告げられても平然としていた息子が、2度目に告げられたときに悲しそうにしたことで、医師からの納得を得られた事例を書いている）。

¹⁰ ここでメイナードは、人間の合理性を、「実践的合理性」とであると言い換えている。そして「実践的合理性」は、状況的合理性であり、肉体をもったものの合理性である、ともいっている。これらは、ガーフィンケルの主張についての、いささか踏み込んだ言い換えになっているともいえよう。本訳稿が貴重な所以である。

文献表 (REFERENCES) ※この「文献表」は、英文の元原稿と全く同一とした

- Boden, Deirdre. 1990. "The World as It Happens: Ethnomethodology and Conversation Analysis." pp. 185-213 in *Frontiers of Social Theory: The New Synthesis*, edited by George Ritzer. New York: Columbia University Press.
- Clayman, Steven E. 1989. "The Production of Punctuality; Social Interaction, Temporal Organization and Social Structure." *American Journal of Sociology* 95: 659-91.
- Coleman, James S. 1990. *Foundations of Social Theory*. Cambridge: Harvard University Press.
- Denzin, Norman K. 1990. "Harold and Agnes: A Feminist Narrative Undoing," *Sociological Theory* 8: 198-216.
- Garfinkel, Harold. 1967. *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Giddens, Anthony, 1984. *The Constitution of Society*. Cambridge, UK: Polity.
- Giddens, Anthony, 1987. *Social Theory and Modern Sociology*. Stanford: Stanford University Press.
- Goffman, Erving. 1964. "The Neglected Situation." *American Anthropologist* 6: 133-36.
- Goffman, Erving. 1971. *Relations in Public: Microstudies of the public Order*. New York: Harper and Row.
- Goffman, Erving. 1983. "The Interaction Order." *American Sociological Review*, 48: 1-17.
- Rawls, Anne. 1987. "The Interaction Order Sui Generis: Goffman's Contribution to Social Theory." *Sociological Theory* 5: 136-43.

【訳者解説-出典と解題-】(樫田美雄)

本誌(『現象と秩序』誌)で今回翻訳したこの小論の出典は、以下の通りである。

Douglas W. Maynard, 1991, "Goffman, Garfinkel, and Games", *Sociological Theory*, Vol. 9, No. 2 (Autumn, 1991), 277-279.

この小論の翻訳の権利については、訳者である樫田が、神戸市看護大学からの派遣で米国への在外研修に出た2016年8月に、受入教官であった著者本人から直接得ている。諸事情から、翻訳が遅くなってしまったことを、メイナード教授にはお詫びしておきたい。

以下、残った紙数で、刊行後30年近く経た2019年にこの小論を翻訳する意義について、3点にまとめる形で、書いておきたい。

まず、「ゴフマン、ガーフィンケル関係史」という社会学史上の議論に貢献する意義が、本訳稿にはあるといえるだろう。日本では、おそらくは、ゴフマン受容に連続するものとしてガーフィンケル受容があったため、両者の関係が微妙であることについては、時々言及されるけれども、両者の相違が表立って主題化されることは少なかったように思われる。そういう状況の中で、今回テーマとなっている「アグネス論文」における、ガーフィンケルからの「ゴフマン批判」については、精密な議論が必要であったにもかかわらず、あまりなされて来なかったのではないだろうか。

我田引水になるが、この「アグネス論文」における、「ゴフマン批判」について、その紹介論文としては、日本国内では樫田(1991)が最初であったと思われる。しかし、樫田(1991)が刊行されたあとは、(管見によれば)わずかに、中村和生氏(現青森大学社会学部)の修士論文における言及等があるだけで、近年まで、直接には、ほとんど論じられることがなかった。しかし、今回訳出したメイナード論文では、樫田論文とも少し違った観点から、ガーフィンケルとゴフマンの関係が論じられている(たとえば、ゴフマン的な戦略分析が、ガーフィンケル的な日常的コミュニケーションの基盤の上ではじめて可能になるものであろう、と指摘されている点など。詳しくは後述)。ゴフマンはいまだに謎であり、ガーフィンケルもいまだに謎である。この大きな2つの謎と謎の関係を考えることは、それぞれの謎を解いていく、契機になるはずだ。そのように考えれば、「ゴフマン、ガーフィンケル関係史」という社会学史上の議論に貢献する質がこのメイナードの小論にはあるといえるのではないだろうか。すなわち、社会学史的意味において、今回のメイナード論文の翻訳には意義があるということが出来るはずだ。これが、今回の翻訳の意義の第1点目である。

さて、あと2内容、述べなければならない。少し先を急ごう。二つ目は、「アグネス論文理解」上の意義であり、三つ目は、「社会学における人間理解」上の意義である。

まずは、前者から。「アグネス論文」は、メイナード教授の理解によれば、「特別に困った状況にある人間による、特別な切り抜け方(パッシング)」を紹介したものではな

い。たしかに、ゴフマン主義者の立場からみると「トランスセクシュアル [であるアグネス] の社会的課題は、他人が彼女 [すなわち、ペニスと元男性としての人生経歴を持つアグネス] を普通の女性だと見なすように、[他人が受けとる] 印象を戦略的に管理する」(本号 59 頁) ことなのだが、現実のアグネスは、そのような活動ばかりをしていたのではなかった。現実のアグネスは、むしろ

「彼女の期待や予想は、しばしば外れた。さらに、「パッシング (やり過ごし)」を上手く行うことができた理由は、「これを行えば、あれが起こる」というような、抽象的かつ規範的な印象管理のおかげではなかった。他人の現実的な各々の反応に基づいて、「彼女の行為および経験が、目指していた自然で標準的な女性像とどのように一致しているか」を考える必要性がすべての瞬間に満たされていたことこそが理由である。たとえば、アグネスには、他の女性 (彼女のボーイフレンドの母親など) と、装うこと、買い物すること、そして料理をすること、などの「女性」の事柄について話し合うなかで、自分自身をうまくパッシング (やり過ごし) できる存在にしていく [事前戦略的] 保証はなかった。代わりに、アグネスはそれらの話し合いのまっただ中において、「どんな」女性でもそうするように、彼女が知る必要があることを学んだのだった」(本号 60 頁)。

この引用の『『どんな』女性でもそうするように』という部分は、「普通の女性ならどんな女性でも「女性」の事柄について上手に話し合いができるのだが、そのような普通の女性になるために、アグネスは知る必要があることを、当該の「女性」の事柄に関する語りの中で学んだ」という意味だと思われる。とするならば、アグネスは確かに特別な人生史をもっているが、そのことを積極的に表に出したり、隠したりしなくても、現場はやり過ごせた、ともいえるだろう。とすると、「アグネス論文」の意義は、そこで聞き取られた内容が、性転換希望者であるという特別な人間の特別な生き抜き方である、そこに意義がある、と主張する積極的な必要性を無くしているのではないだろうか。これが、第二話題に関する私の提案である。

鶴田 (2015) は、ジェンダー研究に関わるガーフィンケルの貢献を、「パッシング研究から、・・・(中略)・・・Doing Gender 研究への移行」(鶴田 2015 : 75) として称揚している。私の立場はこの立場に近い。「人が性別を持つこと自体は、生まれたときから何か特別なことをしなくてもそうであると、通常は考えられている。しかし、そうではなく『女/男であること』を、私たち個々人が不断に『行うこと』によって、成立していることだと捉えるのが、Doing Gender という言い回しの基本的な考え方」(鶴田 2015 : 74) なのであり、この考え方は、ガーフィンケルの「アグネス論文」に、その起源をさかのぼらせることができる考え方なのだ、と鶴田は主張するのである。

じつは鶴田には、ゴフマン批判だけでなく、ガーフィンケル批判の論点もあり、ここでその議論の全体を精密に紹介することはできないが、訳者としては、鶴田の議論 (た

たとえば、ガーフィンケルもゴフマンも、「見せるレベルの相互行為の層における性別」にのみ注目していて、意識的判断以前のコミュニケーションの層としての「見る層」には注目できていない、という鶴田の議論)を、精緻化する助けになる議論が、メイナードの小論の中に存在しているように思っている。上でも簡単に述べたが、メイナードは、以下のような構図を呈示している。すなわち、「彼らの社会環境に対する感覚(『規則の支配下』)にあり、それ故に戦略的管理が可能であることを含む)は、自明視された諸要素つまりはアプリアリな日常的慣行に彼ら自身が忠実に従っているということに依存している。そして、この自明視されたアプリアリな日常的慣行は、行為者が感じ取る社会環境を最初に提供するものである」(本号 59 頁、下線は檜田による)。すなわち、メイナードは、下線部のような、ゴフマン的な戦略的なパッシング観が分析にふさわしいような現象部分でさえ、ガーフィンケル的な相互反映的なパッシング観が成り立つ根拠としての、我々の日常性に依拠して成立しているのだ、と主張しているようなのである。ここには、「戦略性の基盤としての日常」、「特殊性の基盤としての普通さ」、などと言い換えてもよいような、社会メカニズム認識が示されているのだが、このメイナードの記述をベースにすれば、「アグネス論文は、特別な状況の人に関する特別な社会的メカニズムの研究なのか」(理解 A)、それとも「アグネス論文は、普通の男女に関する普通の性別確認メカニズムの研究なのか」(理解 B)という二者択一的議論を乗り越えて、その2者を統合するアイデアが含まれた論文として、「アグネス論文」を考えて行くヒントが得られる小論として、メイナード論文をみなすことも可能になるのではないだろうか。これが2つ目の意義である。

最後に、3番目の意義に触れておこう。3つ目の意義は、「社会学における人間理解」上の意義であった。

この論点に一番関係する部分を引用すると以下の部分ということになる。

「ゲームのルールは最初から知られており、ゲームが完了するまで無傷のままなのである。一方、実生活では、人々は、『関連性の織物』(Garfinkel 1967:166-67)として、リアルタイムで管理されなければならない、予期していなかった状況や、その場その場の条件(コンティンジェンシー)をともなった、連続的な行為に埋め込まれている。」(本号 59 頁、下線は檜田が付した)

ここでは、関連性(レリバンス)と偶有性(コンティンジェンシー、偶有的条件性ともいえる)が、現実理解のキー概念であることが主張されている。すなわち、他のようでもあるかもしれないけれども、今回はたまたまそうであったというような意味での、状況というものの「条件性」や、状況の総合的特質のなかで、個別のものの注目される性質が違ってくるといような意味での、「関連性」に関連した多様性が、注視されているのである。このようなエスノメソドロジーの立場からいえば、同じようなカテゴリーの事件であっても、そこで何が与件で何が争われているのか、ということすら、現実には、日々揺れ動いているし、探究されなければならないことがらになるのである。

私は、どういうことを言おうとしているのだろうか。たとえば、このような立場から「障害学批判」あるいは、「障害学の一般理論としての障害社会学への展望」を語ることができるかも知れない、ということが言いたいのである。

吉村 (2016) は、そのタイトル (『カツラ』から『ウィッグ』へパッシングの意味転換によって解消される『生きづらさ』) からわかるように、円形脱毛症患者における「パッシング」の意味転換を論じた論文である。円形脱毛症患者の一部は治療があまり有効ではない。そのときに、みずからの存在のうち、円形脱毛症患者であるという特徴を、自己に関する中心的特徴で、かつ、常時、レリバンスが生じている特徴であると見なしてしまえば、頭につける「毛髪代替物」は「カツラ」とならざるを得ない。しかし、みずからの存在のうち、円形脱毛症患者であるという特徴よりも、おしゃれ好きの女性であるという特徴を、自己に関する中心的特徴で、かつ、対人コミュニケーションにおいて、レリバンスが生じている特徴であると見なすことができってしまうのならば、そのとき、頭につける「毛髪代替物」は「ウィッグ」となるのである。もちろん、相互行為当事者の片方の一方的意欲で「意味転換」が可能になる訳ではない。けれども、「障害者」の生きづらさの一部は、相互行為時にレリバンスの対象となるものが変化するだけで、解消することがあるのではないだろうか。障害者がつねに障害者であるとは限らない、ということ、社会学的に適切に論じる学問として、もし「障害社会学」を構想することができたならば、それは、「障害学」を部分的な特殊理論とする、一般理論としてのポジションを得た学問になっていくのではないだろうか。そんなことを夢想する根拠にも、今回のメイナード論文はなっていると言えるのではないだろうか。

事例をもう一つ上げるのならば、大上と榎田がインタビュー調査した「発達障害当事者」で「中途診断者」だった人々の一部は、診断を受けてから数年後には、WEB上の発達障害者コミュニティにもほとんど参与しなくなり、かつ、服薬についても、自主的断薬を試みるようになっていた (大上・榎田 2012)。その結果、朝起きるのがつらかったり、休日の部屋の片付けが困難になったり、いろいろと大変な目に遭っていたのだが、そのような報告をしつつも表情は明るかった。このちょっと了解困難な「発達障害当事者」の生き方選択の問題に関しても、メイナード論文を踏まえるならば、そのわかりにくさこそが、非ゲーム的社会環境を志向している証拠だ、という議論が可能になるのではないだろうか。そうやって、断薬等しながら、自らの社会的環境をなんとかかんとか努力して管理しようとするところこそが、社会環境を生きているという実感につながっていたのではないかと、いう気がしてならないのである。そのように考えれば、いろいろな「障害」が関係した事象の了解可能性が増すようにも思われるのである。つまり、メイナード論文をもとに考えることで、「社会学における人間理解」の可能性の幅をひろげるのならば、そうやって、固定的で、時間的に一貫したものとして行為者の自我を考える立場から、流動的で、時間的に変化しうるものとして考える立場に、切り替わっていくことができるのならば、そこに、メイナード論文の3つ目の意義があるともいえる

ように思われるのである。

以上、3つの論点から、2019年の今、メイナード論文を翻訳する意義をまとめてきた。第一に、「ゴフマン、ガーフィンケル関連史」上の意義を訴え、第二に、「アグネス論文理解」上の意義を訴えた。この第二の意義は、ジェンダー&セクシャリティ研究上の意義、と言い換えることもできるだろう。最後に、「社会学における、後期近代的な人間観にフィットしたもの」として「アグネス論文」でのガーフィンケルの人間理解を読むことを試み、かつ、そのような読みに基づく応用を促すものとして、メイナード論文を読んだ。この最後の論点は、エスノメソドロジーの人間観理解の素材として、メイナード論文を読む意義、と言い換えることもできるだろう。

じつは、第一の意義に関しては、樫田（2018a）においても書いており、第三の意義に関しては、（うっすらとではあるが）樫田（2018b）においても言及している。上述の議論に興味関心を持って頂けた場合には、合わせてお読み頂ければ、幸いである。

文献表（訳者解説で言及したもの/参考にしたもののみ）

Denzin, Norman K., 1990, “Harold and Agnes: A Feminist Narrative Undoing”, *Sociological Theory*, 8 (2) : 198-216.

樫田美雄, 1991, 「アグネス論文における<非ゲーム的パッシング>の意味：エスノメソドロジーの現象理解についての若干の考察」『年報筑波社会学』3: 74-98.

樫田美雄, 2018a, 「ビデオで調査をして当事者研究的社会学調査を行おう（ビデオで調査をする方法③）」, 『新社会学研究』3 : 192-197（新曜社）.

樫田美雄, 2018b, 「エスノメソドロジー・会話分析の現代的意義と課題-エスノメソドロジーは、社会学の機能不全に理由を与え、社会学を危機から救うが、課題も残るだろう」, 『質的心理学フォーラム』10 : 54-61.

Maynard, Douglas W, 1991, “Goffman, Garfinkel, and Games”, *Sociological Theory* 9 (2) : 277-279.

西川知亨, 1999, 「<書評論文>ゴフマンとそのテキスト」, 『京都社会学年報』259-266.

大上梨奈・樫田美雄, 2012, 「中途診断というカテゴリー変化の中で生きる—発達障害者の中途診断経験と自己探求の社会学」, 『徳島大学地域社会研究』1 : 1-14.

鶴田幸恵, 2009, 『性同一性障害のエスノグラフィ』, ハーベスト社.

鶴田幸恵, 2015, 「『他者の性別がわかる』という、もうひとつの相互行為秩序—F t Xの生きづらさに焦点を当てて」, 中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン—やりとりの秩序の社会学』新曜社, 72-103.

吉村さやか, 2016, 「『カツラ』から『ウィッグ』へ—パッシングの意味転換によって解消される『生きづらさ』」, 『新社会学研究』1 : 119-136（新曜社）.

【編集後記】 ※ 本冊子は、第 10 号記念号（改訂版）です。翻訳部分を改訂しました。

『現象と秩序』第 10 号記念号をお届けします。これまで、半年に 1 冊ずつ発行してきましたので、2014 年 10 月の創刊以来、刊行前の準備期間を入れて、丸 5 年がたったということになります。ひとつの区切りと考え、総目次（発行順と著者名順）を掲載しました。また、この総目次の冒頭には、堀田委員による「ふり返り」が掲載されています。特集間関係を中心に、本誌がゆるやかなまとまりをもって発行され続けてきたという内容です。この記事と「総目次」をガイドにして、過去の号に掲載された諸論文を読み返して頂ければ、幸いです（全ての号が WEB 上に存在し、かつ国立国会図書館にも入っています）。

本誌は、一見ばらばらな論考の寄せ集め誌にみえます。しかし、一定の方向性はある（あるいは、出てきた）、とも言えるのではないのでしょうか。たとえば、本号の第 2 論文の末尾では、つぎのような主張がなされています。「罵り表現の運用のされ方については、粗雑どころかむしろ精密で洗練されたもの」（本号 35 頁）であることが発見された、という主張です。罵るときに、人はぞんざいな言い方をしますが、そのぞんざいさのなかに、ぞんざいさにおいて、洗練が見い出される、というのです。過去に掲載されたエスノメソドロジー系の論文においても、似た主張がありました。例えば、先号の舞弓・樫田論文では、看護学生の「無駄な質問（知っているはずのことを聞く質問）」中に、看護学生の「専門家的慎重さ」が読み取られています（9 号 50 頁）。両論文の主張はともに、一見誤った/乱雑な「現象」のなかにも、有意味な「秩序」があることの発見として、位置づけることができるでしょう。いずれも本誌らしい論文といえると思います。最近『現象と秩序』という本誌の誌名が各論文から透けてみえるようになってきている、という言い過ぎでしょうか。

11 号からは、堀田裕子氏に編集長を交代します。次の 5 年間も『現象と秩序』誌を、どうぞよろしくお願いいたします。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2018 年度）

編集長：樫田美雄

編集委員：樫田美雄(神戸市看護大学)、中塚朋子(就実大学)、堀田裕子(愛知学泉大学)

編集幹事：松田侑子(神戸市外国語大学)

編集協力・印刷協力：村中淑子(桃山学院大学)

『現象と秩序』第 10 号記念号 2019 年 3 月 31 日発行 (Revised July 26th, 2020)

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 樫田研究室 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (樫田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848, ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>